

詠む

毎日歌壇

伊藤 一彦選

体温に近づくと気温 秋揺れる秋は迷子になっ
ていないか 蓮田市 岡野 初子

△評▽例年なら気温が下がっていい時期な
のにいつまでも高温の今年。「秋は迷子に
なっていないか」とつぶやく作者。

十月の風に刺繍をするように飛び絵になっ
てゆく秋 カナダ よだか

△評▽カナダにいち早く訪れた秋を感性
豊かに鮮やかな比喩で歌う若い学生の歌。

秋風にロングスカートはためかせ我は帆船き
みへ漕ぎ出す 札幌市 住吉和歌子

ほぼ一生時計気にして暮らせるも時そのもの
を見たことがない 古賀市 砂山ふらり

虐待のショックで身からたましいが出るんだ
よって沖繩の友 群馬 金子 歩美

数かずの名曲の影 幾百の性被害者の懊悩の
うた 米子市 田後 直子

お隣のおちゃんいつの間におじちゃんじわじ
わ昭和が昭和がしほむ 池田市 黒木 淳子

肩組んで「友よ」を歌った昭和とは夜明け前
だと思つてゐたが 東京 池崎富実夫

世の中のあらゆる情報集めてもスマホは私の
視野を狭める 国立市 佐藤 建

三代目金馬師匠のハゲ頭ほくもニッポン人で
よかった 雲南市 熱田 一俊

米川千嘉子選

土砂崩れで連休区間のある町に父の病院はひ
っそりと建つ 千葉市 佐藤 綾子

△評▽豪雨による土砂崩れか。父は無事の
ようだが、災害報道の向こうに作者は父の
寂しさのようなものを感じたのでは。

ビール樽 ウィスキー樽 になりたしと旅人なら
この世もぎつと楽しむ 幸手市 中村 早苗

△評▽大伴旅人はなまじっか人であるより
酒つぽになりたいと詠んだ。

妻の身の水中生活終えた子よベッドで寝入る
星月の夜 須崎市 野中 泰佑

お互いの経年劣化に触れぬま素顔をさらし
会議は進む 新発田市 飯田 英範

女の子は名前にしときなさいと言われそうし
た卒業記念印鑑 京都市 小池ひろみ

「いつも姿勢がいいね」と言いくれしひとへまだ背
伸びして生きておられます 春日市 林田 久子

ピートルズをきくと知らないランドセル横断
歩道の白だけ踏んで 久留米市 春日 登

化粧する喜びは誰が教えしや電車のなかに紅
出す高二 城陽市 近藤 好廣

すでももう心霊写真は怖くないMRIに写り
し何か 奈良 島 眞澄

行き合ひの空に尋ねる亡き母の働きづくめと
介護の一生 高崎市 樋浦マサエ

加藤 治郎選

海匂う無人駅には君がいてときどきゆっくり
日傘をまわす 垂水市 岩元 秀人

△評▽ノスタルジックである。昭和の映画
を見るようだ。海・無人駅・日傘と明るい
夏のイメージである。下句の動きがよい。

おやすみがこんなに似合うタリーズの夜汽車のよ
うなミルクスチーム 武蔵野市 北谷 雪

△評▽清潔なボエジーを感じる。夜汽車
とミルクスチームの白さの対照が心地よい。

藤椅子の冷たい軋み父が読む中原中也いつも
のグレイ 東京 新井 将

駅前で知らない人に渡されたエナドリそれが
あるから平気 東京 岩松 ぼむ

Yシャツは襟からかける。アイロンは力を入
れず滑らせること 雲南市 熱田 一俊

糖尿でジューズ厳禁の古老や自販機前で案山
子と化す 須崎市 野中 泰佑

わたしではだめだと言って ちちちちと舌打
ちつづくコンロの種火 札幌市 鈴木 精良

えんえんとえんえんと待たされている待合室
にナースのスタバ スペイン 椎名ろさな

コールスロー刻んで淡い震動を起こして私を
取り戻す宵 東京 土居 文恵

霧雨の港できみの黒髪は白く光った また秋
が来る 東京 森本 有

水原 紫苑選

心とはなんなのだらう剥かれたる林檎を誰も
綺麗とは言はず 相模原市 高田 祥聖

△評▽リンゴが皮をむかれた時、そこにあ
るのはリンゴの心なのか。赤い実を美しいと
言った人々は沈黙してむさぼり食べるのみ。

ゆっくりと檜の木になるあなたから懺悔のよ
うに木の実ほこぼれ 東京 奥山いずみ

△評▽カシノキになるその人は幸せなの
か。ざんげのように木の実を与えながら。

美しい貝の住み処となるためにきみの眼球ゆ
っくり転がる 東京 高田 尚宏

野良犬とすれ違ふときサビエンス以前のわた
しが降臨する 中国 岸 志帆莉

歌とキョークロアスの眼のやうに満月がわ
れを見透かしてゐし 名古屋市 浅井 克宏

四季のない熱帯林に不死鳥の花を咲かせてあ
でやかな雨 碧南市 江原 冬莉

秋空にちぎれた雲が一人でも生きていけると
無理をしている 札幌市 橋 晃弘

霧の中いつか出逢える銀色の狼それが私の
番い 松本市 飛 和

サイダーの泡がコップにしがみつくとおもちゃ売
り場の子どものように 倉敷市 中路 修平

まだ若い葡萄のようにカナファンはその身すべ
てを張りつめさせて 千葉市 芍 葉

投稿規定 はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051 (住所不要) 毎日新聞学芸部。短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生 (希望選者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます